

# チャンス・チャレンジ・チェンジ

秋田県立養護学校天王みどり学園 加賀谷 勝

## 平成25年度 相談・支援活動を振り返って

- 1 幼稚園・保育所
  - ・定期的に訪問することで、子どもの変容に合わせて具体的なアドバイスや資料提供ができた。福祉や保健関係者との同行訪問により、複数の目で子どもを捉えられた。
  - ・家族支援が必要なケースが増えており、保護者学習会の開催や関係者との同行訪問の継続が必要である。
  - ・個別の指導計画の作成から活用へ、レベルアップを図っていく。
- 2 小学校
  - ・計画的な訪問が、児童の変容につながった学校があった。次年度は評価を自校で行えるよう自己解決力アップを目指していく。
  - ・検査結果を基に、個別の指導計画を一緒に作成し、目標や支援内容・方法を考えたケースがあった。緊急性の高いケースについては、今後も継続したい。
  - ・今年度初めて取り組んだ障害理解を目的とした出前授業により、「子どもたちの障害に対する考え方が変わった」という声を聞いている。周囲の子どもたちの見方が変わることは、共生社会実現に向けた一歩になる。中学校や高等学校にも広げていきたい。
- 3 中学校
  - ・個別の指導計画作成に保護者も参画したことで、学校と思いの形が重なり、生徒の変容が見られたケースがあった。
  - ・学校によって校内支援体制に温度差がある。コーディネーターの役割や個別の指導計画の必要性等、好事例を紹介していきたい。
  - ・進路を切り口にして、本人の自己理解と保護者の子ども理解が鍵となる。

※小・中学校においては、通級指導教室の担当者や上級特別支援教育コーディネーターが地域の核となるような体制づくりが必要である。
- 4 高等学校
  - ・高等学校特別支援隊の誕生によって、相談・支援活動の回数が増えた。また、幅広いニーズに応えることができた。さらに、高等学校特別支援隊のPRに努め、「活用してよかった！」を実感できる支援を展開したい。
  - ・生徒自身が支援の必要性を感じることを前提となる。検査結果を本人に伝えるなどして、生徒のモチベーションを高める仕掛けと、物事を続けられる環境づくりの役割を担いたい。
  - ・特別支援教育の必要性や校内支援体制の構築について、職員間に大きなズレがある。
- 5 市町村
  - ・就学支援シートや5歳児健診・相談会など、各地域で具体的な動きが出てきた。さらに、関係機関が垣根を越えて連携するためには、双方のできること・強みを持ち寄り、役割分担できる体制が大切である。今後も「つなぎ役」を果たしていきたい。

**お知らせ**

東洋館出版社発行「特別支援教育研究」4月号と5月号に、本校のセンター的機能の取組が紹介されます。発売は3月末と4月末です。お近くの書店でお求めの上、ご覧ください。定価820円！